

龍族

RYUZOKU
第27号

南天会
令和6年
1月1日



辰年―龍族のオマージュ こいのぼりの賛歌

宮本光研

今年の干支は辰＝龍。くわしいことはともかく、十二支の中で唯一、架空の動物。河川―滝を登るサカナで、天までとどき、空を泳ぐ。その飛躍たるや。

ある寺総代（農業）が「和尚、近所の澱川を登る鯉を見に来てごらん。」と教えてくれた。五月の月夜遅くに行ってみると、鯉の一群がものすごい勢いで登っていた。獯猛といってもいい。真鯉の群れであった。

鯉にヒゲがあるどころか、角が生えているかの如く、遡上する回遊魚、サケやマスと同じである。急流や懸崖でジャンプをくり返し「ふるさと」へ回帰する。「阿字のふるさと」であろうか。映像で見るばかりであるが、まさに生きるとはこのことかと知らされる。その勇氣、努力たるや！

また日本画家、森山知己さん（吉備高原都市に在住）の『鯉魚図』を見て、まさにこれだと思った。鯉に角が生え、天に登らんとしている。

龍は仏典にも出る。インドでナーガ（蛇）と称されるが、別のものではないか。大乘仏教、密教の始祖がナーガルジュナ（龍樹＝龍猛）ボサツで、南天に生まれ、インド原生民かとされる。名前にナーガ「龍」がもてはやされ、一族をなしている。

中国では沢山あちこちに断崖流水があつて「龍門」と称される。黄河を登る鯉が「こいのぼり」で知られる。日本は初夏、五月の空を泳ぐ。「こい幟」が有名。ノボリ（幟）でのぼる子供のまつりで祝う。

ササイ秀領師はお弟子に「龍」一字を付される。ご自身がナーガルジュナ秀領で、仏法の大事を受法、継承している。龍族の健勝が祈られてならない。

辰は龍、巳は蛇。

こいのぼり

イラカの波と
重なる波の
橘かおる
高く泳ぐや

雲の波
中空を
朝風に
鯉のぼり

白瀬の滝を
たちまち龍に
わが身に似よや
空に踊るや

登りなば
なりぬべき
男子と
鯉のぼり



森山知己『鯉魚図』



第 67 回大改宗記念式典レポート

10 月 22 日～ 24 日、ナグプールにて佐々井上人を大導師として大改宗記念祭が開催されました。本年は南天会でも参加ツアーを催行し、他にも多くの日本人の方々が記念祭に参加しました。また記念祭で行われる得度式にて 14 人もの日本人が佐々井上人の元で授戒され、新たな龍族が誕生しました。得度された中、4 人の方々からお言葉を頂きましたので掲載いたします。

写真：福持英助（表紙含）





龍聖

野田貴弘さん

インド改宗式典の南天会ツアーに参加した浜松在住の野田と申します。

法名は龍聖です。(リュウセイ)

初めてのインドで1番に感じた事は、今を生きているという活気でした。

改宗式典は、大勢のインド民衆で更に活気はパワーアップ。

約1時間以上に渡り日本人の為に得度式を取り行つて頂き、上人の言葉に何度か目頭が熱くなりました。

慣れない袈裟で四苦八苦しながら会場内外を歩いていると、どこからともなく ジャイビーム バンテージと声をかけられ

「一緒に写真を撮って下さい」と言われる方の前で礼拝をされる方が集まり身動きが取れない

ほどの人達に囲まれて一瞬、ハリウッドスターにでもなった気分が酔いしれて煩惱だらけの心にみなさんの尊敬という眼差しの矢がグサグサと心に刺さり

まくり 精進 精進。

その他いろいろとインドで貴重な体験をさせてもらい、インドから帰国。

インドで頂いたみなさんの熱い尊敬の眼差しと上人の利他の精神 を心の中心に置いて

自分なりの仏道を極めて生きたいと思います。



龍使

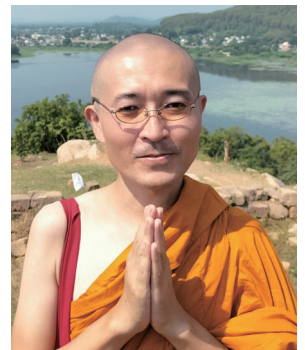
高木隆さん

高木龍使と申します。この度、佐々井上人の導きにより仏教の得度を受け、その厳かな儀式は私にとつて人生で最も意味深い瞬間の一つとなりました。

上人たちの丁寧な説明と導きのもと、私は心身ともに清らかな状態へと導かれました。仏教の教えに触れ、物質的な欲望から解放され、心が平穏な状態に整えられたことに深い感謝を抱いています。この瞬間の幸福は言葉に尽くしがたく、心から嬉しく思います。

日本においては、様々な事業を展開しており、特にコロナ禍においては多くの困難に直面しました。しかし、家族、従業員、協力者、そしてお客様のために力を尽くし続ける中で、時折自身の限界を感じることもありました。得度を迎えるにあたり、自らを一度は死んだものとして捉え、新たな視点から前向きに物事を受け止めることができました。

得度を通じて、自分自身と向き合い、内面の平穏を求める旅路に出た気がしています。これからも仏教の教えを胸に刻み、慈悲深く、誠実に生きていくことを心に誓います。この貴重な経験は私の人生において永遠に輝く宝物となり、仏教の智慧に導かれた新たな旅が始まったことを深く感じています。



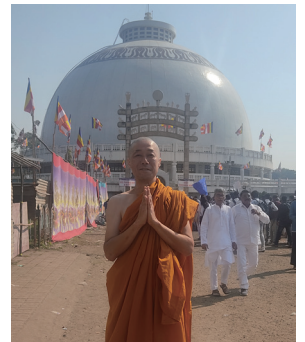
龍城

須藤義人さん

沖縄在住の須藤龍城と申します。佐々井秀嶺バンテージから、2023年10月23日に「龍城(ナーガキラー)」という法名を頂きました。インドの中軸に位置するナグプールは全龍族の「法城」でもあり、ダンマ(法)を守る御役目を頂戴したと思い、「龍城」という名の拝命に新たな使命感を抱いております。

去る6月末の龍族会議(東京)に参加させて頂き、バンテージの気迫に引き込まれ、「出家の道は厳しいぞ。得度したい人はナグプールへ来なさい!」という叱咤激励に導かれるままに「南天龍宮城」に赴きました。その際に龍族会議で出会った方々とも再会ができて、一緒に得度式に参列させて頂いたことを嬉しく思います。

ナグプールの離れる日に、インドラ寺に御礼のご挨拶に伺いました。バンテージは3日間の集団改宗式や集団得度式の御疲れもあつて横になられておりましたが、「龍城か。沖縄には新城とか金城とか、(城)に纏わる名前が多くあるんですね。決断力を持つて、使命感を持つて前進しなさい。あと、南天会を支えてくれ」と、澄んだ眼差しで物静かに声を掛けて頂きました。握って頂いた手の体温が思っていたよりも高く、体調不良の中でも人々のために献身し続けるバンテージの菩薩道をお支える出家者とならなければいけないと、その時に再認識した次第です。



龍雨

井上善雄さん

50才を過ぎた昨年、大切な友人を事故で亡くしました。人生にはやはり限りがあります。

私は今、生きるべき道を歩いているのか? 自身の想いをありのままに語り、行動出来ているのか? そんな苦しみの中、ご縁で佐々井バンテージという素晴らしい方を知りました。素人ながら仏典に触れ、自分の進む道は仏道にあると信じ、ナグプールに飛ぶことになりました。南天会様の現地集合ツアーに参加しまして、皆様と大改宗祭に参加してまいりました。

私は仕事の関係で、インドには何度も訪れておりますが本当に街が綺麗なのに驚きました。そんな中、個人参加の皆様と会場にて合流しました。会場にてインドの方々と一緒に、バンテージより儀式を受け、得度しそれぞれ名前を頂戴いたしました。1番の驚きは、2日目のお勤めに向かう道のりでした。その仏教徒であらう人の数多さ。街々で聞こえてくるジャイビームの咆哮。極めつけは得度1日目の私達に、人々がバンテージ!と敬い、なんとお布施を渡してくるのです。

衝撃でした。全てはバンテージの民衆に対する愛の蓄積を目にしました。そして2000年の、仏教の長い歴史の末端に立っている自分自身を自覚した出来事でした。全てはこれからですが、バンテージとご縁に感謝し菩薩道を歩んで参りたいと思っております。

「バンテージとお舍利」

位田龍樹

以前バンテージとインド国立博物館へ行った際に、そこにあったお舍利（しゃり）とバンテージの因縁についてバンテージからお聞きした話です。

時は1898年（明治31年）、インドはまだ英国植民地時代の事です。ネパールとの国境近く、インドのピッパルワー（ピプラーワー）という所で、ペッペ氏という英国人がある遺跡を発見しました。それはストゥーパとは塔を意味し、卒塔婆の語源です。氏は発掘の素人だった為、地面に埋まるストゥーパを上から壊しながら下へと発掘していきまし

た。すると上から二割ほど掘り壊した所から、小さな壺が見つかりました。その壺の周囲には、今から約2300年前の古代インドのマウリヤ朝のアショーカ王の時代の文字で、「この舍利は、カピラヴァストウの釈迦族が奉祈する舍利である」と書かれていました。カピラヴァストウとは、古えの昔、釈迦族が治めていた都の名前です。即ちそこは釈迦族の王子であつた仏教の開祖、ゴータマシッダールタこと、お釈迦様の出身地にあたります。つまりそのお舍利は、お釈迦様入滅後少しして現れたアショーカ王によって収められた、紛れもないお釈迦様のご真骨であり、それは世界的な大発見でした。また当時、近代ヨー

ロッパが学問の中心であつた時代、辺境アジアの釈尊とは伝説上の架空の人物では無いかとその存在を疑問視されておりました。しかしその発見は世界に轟き、釈尊の存在を証明する揺るぎない証拠ともなりました。

ここでお断りしておきますが、そもそもお舍利とはお釈迦様のご遺骨の事です。しかし時代が下り仏教が多くの人に伝わる中で紛い物が混じつてきたり、また舍利を示す物もその意味も少しずつ変化していきます。ですが事この話に関しては、お釈迦様の本物の遺骨を指してのみお舍利と呼ぶ事とします。

世紀の大発見を受け、ペッペ氏はこの仏舍利や入れ物の壺を、一度自国の英国にある大英博物館に送ります。しかしキリスト教国である英国にとつて、お釈迦様のご真骨の意味は分かってもまさか祀る訳にもいきません。ならばと再びインドへ送り返すにしても、アンベードカル博士前夜のインドでは、仏教は西暦1500年頃に滅びたままで影も形もありません。ましてバンテージサイの、インド全土を激震させる大躍動も未だありません。仏教についてインド社会における宗教的認知は皆無であり、未だ英国植民地領でもあり、お舍利を受け入れる土壌はありませんでした。そこでお舎利の扱いに困った英国は、一緒に入っていた宝石等は英国に取り置き、舎利器だけインドへ返しました。そしてお釈迦様のご真骨は、仏教国であるタイへ寄贈する事にしました。

当時のタイ国王はこれが大変喜び、ワットプラケオという王族の菩提寺にこのお舎利を

お祀りしました。次いで国王の手によって、タイで一番古く一番大きい仏塔を持つワットヤーイというお寺へ、その一部が分けられました。更にその後、日本仏教会がタイを訪れた際に日泰友好の証として、タイ国王からこのお舎利の一部が海を越え、日本仏教会へも分けられたのです。そしてそのお舎利は、日本名古屋にある日泰寺で、現在も大切に供養されております。

ここまでは前置きです。ペッペ氏によって、ピッパルワーでお舎利が発見されてから、その後の変遷を簡単に述べました。ここでは要するに、お釈迦様のご真骨が北インドのピッパルワーという場所で発見された、という事がご理解頂ければ結構です。

時代は過ぎ、時に昭和5年から6年にかけて日本青少年ボーイスカウトの子供達が、花



ピッパルワー（ピプラーワー）ストゥーパ跡

田忠一郎公爵に連れられ世界を外遊し、途中タイへも渡りました。当時のタイ国王ラーマ7世閣下は、仏教精神によってアジアの平和を守るという、日本とタイのボーイスカウト連盟の精神に感銘を受けられました。そしてその交流の証に、先のワットヤーイ大寺院から日本へお舎利を分けて下さいました。つまりそのお舎利もまた、ペッペ氏がピッパルワーで発掘したお舎利の一部でした。海を越え日本に持ち帰られた当初、そのお舎利は国會議事堂にありました。しかし関東大震災などの度重なる混乱の中、お舎利は幾度も危機に晒されながら転々と保管場所を変えていきます。次第に東京都は貴重なお舎利の存亡に危惧を抱きます。遠くは天竺から渡来し、また日泰友好の証でもあり、歴史的宗教的価値のある大事な重要なご真骨です。安置に適した所はないかと、あちこちを探しました。そして都内で、由緒ある仏教寺院であり国定公園である、高尾山薬王院に白羽の矢が立ちます。また当時の高尾山貫主の山本秀順大僧正様が、八王子市のボーイスカウト連盟の会長をしていた為、当にぴったり相応しいと、仏舎利は高尾山へ奉納される運びとなりました。その後、東京都が高尾山の景勝の地に舍利塔を作り、以来現在もそこで大切に供養を受け続けています。また先日高尾山を訪れた際には、現高尾山貫主であられる佐藤秀仁和上様のご厚意によりその参拝も叶いました。私事ながらお舎利の前でお勤めをさせて頂いた際、お釈迦様にお釈迦様が説いた教えを、自分がお唱えした声で聞いていただいていると

思うと、鳥肌が立つ様な言いようの無い感動を得ました。

話は変わり、お舍利が高尾山に納められたのとはば時を同じくして、その高尾山に一人の人生に苦悶する青年がやってきました。人生に悩み疲れ、行き詰まっては幾度も自殺を繰り返しその都度偶然助けられ、最後行き倒れた時にその村のお寺に運ばれます。そこで仏縁を得て仏門に入り、彼は改心します。彼はその後高尾山に登り得度をし、師僧の山本秀順大僧正様の一字を貰い、秀嶺と名乗りました。高尾山で仏道に邁進するも、彼は高尾山から下山の命を受け、当てもなく東京へ向かいました。そこで一人新聞配達などをし生計を立てながら、その内正大学に聴講生として入学します。生来のバイタリティーを取り戻しつつあった彼は、今までの鬱憤を晴らすが如く日夜勉強しました。そして聴講生ながらも秀嶺青年は、「衣の会」という会を立ち上げたり、「実践仏教」という同人誌を作ったりと、すぐに頭角を現します。その活躍は、一般の学生からセンパイとあだ名され、頼られ一置かれる程でした。

また丁度その頃、世界仏教徒大会が、ネパールのカトマンズで開かれます。そこには日本からの副団長として、山本秀順大僧正様が出席しておられました。またそこには、在りし日のアンベードカル博士も出席しておられました。もしかするとお二人は逢っていたかも知れませんが、秀嶺青年の活躍も話に上がっていたかも知れません。詳細は、未だ夢の中で

その道中、当時の高尾山貫主であった山本秀順大僧正様をはじめとしたご一行は、高尾山に安置されたお舍利を護って頂いたタイ国のワットヤーイ大寺院へ、そのお札を兼ねて表敬訪問します。更にその足で、タイ国日本人会によって作られたタイ国日本人納骨堂がある、ワットパクナム寺を訪れました。またそこには当時、納骨堂を管理する為、高野山から佐々木弘傳氏が派遣されておられました。秀順大僧正様は、ここワットパクナム寺が修禅や学問の優れた体系を持つ格式高いお寺である事に大変感銘を受けます。そしてまた日本人の佐々木氏もおられるという安心感から、日泰親善の為に高尾山から弟子を一人ワットパクナム寺へ派遣する事を考えました。そこで佐々木氏を通訳に頼み、その住職、副住職の方々と話をし留学僧の約束をしました。その時に秀順大僧正様の頭に浮かんでいたのは、高尾山を飛び出し一人求道する、佐々井秀嶺という気骨ある青年僧でした。秀順大僧正様は日本へ帰国すると、早速彼へ手紙を出し呼び出します。師の命を受け、急に何事かといぶかしむまま、秀嶺青年も高尾山へ向かいました。そこで彼は師僧から直々にタイへ行くよう告げられたのです。

まさに歴史が動いた瞬間、と言いたい所です。がしかし彼は、自分はまだまだやりたい事もあり日本を出るつもりは毛頭ありません、他にタイへ行きたい兄弟弟子は沢山おられるだろうし他の方にどうぞ、とにべもなく断り帰ってしまいました。またしかし、秀順大僧正様もかつて太平洋戦争の時に反戦を訴

え投獄され、いつ銃殺されるかも知れない中でなおも信念を曲げずに貫き通したお方です。環境劣悪な牢獄で根を上げる事なく、400日以上も耐え抜いた気根の持ち主です。そう簡単にお志を曲げるお方ではありません。もしかすると、現在に至る後の秀嶺師のありし姿を、秀順大僧正様はその時既に見通しておられたのかも知れません。その深い御心の内は知れませんが、タイへ行くのは彼しかいないと考えていた尊敬する師僧からのその後の幾度の重々なるその説得の前には、ついに意思強固な彼も折れざるを得ませんでした。そして本人不本意ながら、秀嶺青年は無事にタイへ行く事と相成りました。そして昭和40年の8月8日、秀嶺青年は山本秀順御夫妻様方のお見送りを受け、羽田空港からスカンジナビア航空の飛行機に乗り、一路タイへと飛び立ちました。そして彼はタイで2年の留学期間を、優秀な成績で無事に終えま

す。しかしまた思う所もあり更に菩薩道の体得を目指し、師僧の帰国の命もまたまた聞かず、単身インドへ向かいます。インドへ着いた彼は、自身仏教徒であるからにはとまずは仏跡を参拝して回る事にします。初めラジギールへ向かい、次にクシナガラへ行きました。そこで彼は、偶然、地元の人からピッパルワーという地名を耳にします。彼は、自分と殆ど時を同じくして高尾山に来たお舍利に親しみを感じておりました。そしてそのお舍利が、ピッパルワーで発掘された事を覚えていた彼は、好奇心もあつてか惹かれる様にそこへ向かいます。無事に着く

と彼は興味津々にあちこちの写真を撮って歩きました。と、ペッペ氏がお舍利を発見したストウーパを見た時、彼は妙な違和感を覚えます。ストウーパの下半分が未だ発掘されていなかったのです。後に彼はマンセル遺跡の発掘等、インド仏教史に残る重要な大発掘をするのですが、素人同然のこの時から既に光る何かを持っていた様です。

その後彼は、龍樹菩薩による顕正を受け、ナグプールへ導かれるように辿り着きます。そこは奇しくもアンベードカル博士がかつて多くの仏教徒を導き、活躍した場所でした。そして当時そこは今では考えられませんが、地元のタクシーですら恐れて村の中には入らない、殺人も珍しく無いインド屈指の今で言う所のスラム街でもありました。そこで塗炭の苦しみに喘ぐ民衆を見た彼は彼等を見捨て置くことができず、誰に頼まれた訳でも無いのに文字通り泥水をすすするような極貧の生活を共にしながら、たった一人、彼等の生活向上のために運動を始めます。異国人の彼は初めは当然受け入れられず、嘲笑され石を投げられたり、日々身の危険を覚えながらも、しかし決して諦めませんでした。そして数年間の自己を顧みない献身的な活動によって、気がつけば投石は止み、徐々に人々に理解され受け入れられ、賛同者を得て支援者を増やしていきます。

彼がインドへ渡った当時、仏教の教えは、インド社会どころかインド仏教徒自身にも殆ど認知理解されていませんでした。と言うのも1956年10月14日、60万人もの人

を一度に仏教徒に改宗させたアンベードカル博士は、その改宗から僅か 2 カ月後に急逝してしまっただけです。頼るべき光を失ってしまっただけです。秀嶺青年が来るまでの 10 年間、未だ差別と貧困の無明常夜の苦しみの中で迷い続けていたのです。その惨状を目の当たりにした彼は、彼らの生活を改善させる為に人々の相談に乗り、悩みを解決し、乞われては生きる為の仏法を説き教えました。

そして毎日雨が降ろうが槍が降ろうが一日も休まず、何十件もの掘建小屋同然の貧しい家々を托鉢をして回りました。しかし一日回っても、今という日本円の百円を集めるのがやっとでした。時にはあまりの悲惨さに涙し、自分の僅かな生活費を割いて逆にお金をあげる事も少なく無かったそうです。托鉢して集めたお金で人々が寄り合えるお寺を建てそこでまた仏法を解き、奪い合い憎しみ合う人々を教え諭し、団結させ助け合い、仏教徒としてのあり方を教えました。そして強大な国家、宗教的価値観による言われなき差別に縛られ、貧困の中諦め下を向く人々に、顔を上げる一歩を上げる一歩！ 団結しろ闘え！ と鼓舞し続けました。日本で学んだ大乘仏教そしてインドで学んだアンベードカル博士の説いた教えを、他ならぬ自分の行動を通して見せ示したのです。そして何年何十年も極貧の困窮生活を民衆と共にしながらも、仏教が他の宗教に恥じない素晴らしい思想である事を、どうしたらより皆に理解されて貰えるだろうか、どうしたら仏教を信じて貰えるだろうか、何よりどうしたらこの人たちの生活を

改善できるだろうかと、考えない日はありませんでした。また、師僧の命に背きインドまで来てしまっただけが、お世話になった高尾山に何か恩返しをしなければと、常にその事も頭を離れませんでした。

そんな時に思い出すのは、あのピツパルワのストウパの事でした。あそこには人々の希望となる何かがあると有る、ただその彼の直感だけが、しかし確信を持って彼自身に訴えかけます。私もいぶかしみ何か根拠となる物があつたのかお聞きしましたが、恐るべき事に言ってしまうと、初めにそう直感があつたという、本当にただそれだけの事だった様です。そこで彼は時間を見つけては、考古省のナグプール支部へ行き、その資料室で一人考古学の勉強を始めました。少しして、たまたまそこでナグプール大学の考古学の副部長と知り合います。そしてその方の紹介で、考古省のナグプール支部長であつたシリワストウ氏と出会います。二人は年も近かつた事もあり馬が合い、よく遺跡発掘の話などもしたそうです。そうしている間も、彼はピツパルワのストウパの事が気になってしょうがありません。時折インドを訪れる日本人から頂くお饅頭など珍しい物を支部長に届けてはご機嫌をとり、日に陰にピツパルワのストウパの発掘の重要さを支部長に説いて聞かせます。そして粘り強い秀嶺青年を前に、どうとう支部長も根負けして重い腰をあげました。

兎に角まずは視察からと、支部長は現場視察に行きました。するとさすがに考古学の専

門家です。一目見て、秀嶺青年の言う通りここには何かあると直感し、考古省ナグプール支部の名において直ちに発掘を決めました。そうして発掘すること 2 年。ついにストウパの下から、お舍利の入った、二つのお舍利入れが発見されたのです。しかもこの二つは周囲に碑文こそ刻まれていませんでしたが、ペツペ氏が以前発掘した物と同じ姿形をしておりました。更には、調査の結果ペツペ氏それよりも、古い物である事が分かつたのです。つまり、この新しく見つかった 2 つの舍利器こそ、初めにお釈迦様のお骨が 8 個に分けられた内の一つであり、最初の舍利器だったのです。先のペツペ氏の発掘したお舍利は、後にこの舍利器から更にアショカ王によつて、全インドへ分けられたお舍利の中の一つでした。また検査の結果、中身が人骨であることも判明し、その発見は全インドの新聞紙面を賑わす大きなニュースになりました。お舍利は考古省ナグプール支部が発掘した為、発掘主任の支部長の手によつて一度ナグプールへ持ち帰られました。お舍利が着くやいなや、当然秀嶺青年にイの一番に連絡が来たのは言うまでもありません。すぐに直行し、間近で見、全て写真に収めたそうです。その時の写真は私も見せて頂きました。彼はこのご真骨の発見を誰よりも喜び、胸躍らせました。しかし待てど暮らせど、いつになつてもその研究成果や発掘の詳細についての発表も考古省の公式なレポートも出ません。それどころか肝腎のお舍利の公開もされませんでした。その発表が為されなかつた一説に、そのお舎

利の発見されたピツパルワという場所は、隣国ネパールとの国境間際のすぐインド側にあり、また第二のカピラヴァストウとも呼ばれていました。そのような国境線の微妙な所からこれ程までに重大なものが出てきてしまふ、領土問題にまで発展する可能性をインド政府が懸念し発表を控えたという話もありますが、詳細は分かりません。

そもそも、お釈迦様の生誕の地、カピラヴァストウは現在ネパール領ですが、釈迦族に送られた筈のお舍利が、何故北インドのピツパルワから発掘されたのでしょうか。それについては何も裏付けが無い訳ではなく、玄奘三蔵の記録に、注目すべき記述があります。お釈迦様の晩年に、故郷カピラヴァストウは、隣国のコーサラ国に攻め滅ぼされてしまいました。その時に生き残つた人々が現在のピツパルワの辺りに逃げ延びた、とそこには記載があるそうです。

話が逸れましたが、いつまで経つても彼が何度嘆願申請しても、お舍利も発掘データも一向に公表されません。民衆を元氣付け、また仏教徒の社会的地位向上にとつて、これ以上良い報せはないではないか、そう考える若き青年僧は業を煮やします。その歯痒さは、自分の発掘実績を正当に評価して欲しいと考える、シリワストウ支部長も同じでした。その頃秀嶺青年は、彼の活動を認め支援する民衆によつて推され、当時立ち上がったナグプールブッディストセンターという組織で会長を任されていた。そこで彼は支部長の助けを借りて、資料を集め人の手を借り研究



5月30日高尾山仏舎利塔参拝

編纂し、ナグプールブッディストセンターの出版部からピッパルワールの発掘についての本を、自力で勝手に出版してしまったのです。そして結果から言えばその本はインドに留まらず、世界中の関係各所に送られ大きな反響を呼びました。また遠く日本の高尾山にも贈る事が出来、何らかの形で師僧の恩に報いたいという念願が叶い、長年の彼も胸のつかえもようやく少し和らいだのです。またその本が出てからも、ネパールからはなんの反応もありませんでした。これを見て安心したのか10年ほど経ってインド考古省から、出世した元支部長シリワストウ氏らの手によって、上下2巻各1000ページにもなる写真も豊かな堂々たる本が正式に出版されました。そしてついにご真骨であるお舎利も、デリーの国立博物館で展示される様になったの

です。秀嶺青年がかつて高尾山でご真骨に対し感じた、仏教徒としての教えの確かさと信仰の喜びを、インドの仏教徒にも感じてもらう事ができる。また他でも無いこのインドの地で釈尊のご真骨が発見された事で、仏教はインド古来の伝統ある宗教なんだと社会に広く認めてもらう事ができる。そして何より、インドで今なお続く差別や貧困に負けまいと、もがき苦しむ民衆を勇気づける事が出来る。何百年もの間、飢え、渇き、社会から疎外され自身の存在を否定され、動物以下の扱いを受け続け、生きる事にすら希望を持ってない人々を励ますというただその事が、どれ程至難でどれ程の献身が必要か。人として生まれながら、ただ人として在る事すら許されないという、我々現代日本人には余りに当たり前て理解も出来ない程の重い苦しみを負う人々に、生の素晴らしさをどうしたら味わって貰えるか。必死に差別に抗い、遮二無二仏教徒たらんと学び働く多くの民衆。その困難さを誰よりも知る秀嶺青年の胸は、仏教徒民衆を励ます事ができた事に打ち震えました。そのご真骨は今尚、インド国立博物館で、紀元前5000年前のインダス文明の発掘品と共に、第一級に重要視され、大切に保管されて、世界中の方の目に触れています。そして仏教徒の宝として、皆の厚い信仰の対象になっております。後に彼は、ある事をまた心に決めます。当時、彼の地を揺るがすような活躍によって、インド仏教徒は徐々に社会的に認知されつつ

あり、その数も、生活の質も、上昇の一途を続けておりました。また仏教とはどういう教えであるかも、広く知られるようになって来ておりました。しかし未だマイノリティーであり、まだまだ確固とした社会的地位は得ておりませんでした。その時彼は、インド仏教徒の心の支えとなる場所、ルーツを確認できる聖地の不在に気が付きます。ヒンドゥー教による差別から立ちあがろうとしている仏教徒の聖地、ルーツが、未だヒンドゥー教によって管理されているというこの矛盾。彼は自身関わったお舎利という聖遺物を民衆が熱心に信奉し、心の支え励みにするのを目の当たりにしていました。そして仏教の始まりである釈尊成道の聖地が、民衆にとってどれ程の重要性を持っているかも知れずとも理解していました。そしてインド仏教徒のみならず、世界中の仏教徒全民衆の為に、誰に頼まれた訳でも無いのに、再び、たった一人立ち上がります。即ち、彼らの生きる支えとなる仏教を説いたお釈迦様の聖地、仏教のルーツであるブッダガヤを、ヒンドゥー教から仏教徒たる民衆の手に取り戻す奪還運動を始めたのです。後にそれは彼を中心として大きな渦となり、インド国家全土を揺るがす大運動へと発展していきます。しかしそれはまた別の話。国立博物館で、そのお舎利を見つめる、バンテージのお顔は、旧知の友人に会った様な、どこか嬉しげで、懐かしそうで、またその瞳の奥には、未だ熱く燃えたいが、光りを放っているようでした。

※編集部注

インド考古省調査官シリワストウ(K.M.Srivastava)氏によるピプラーワー新発見の仏舎利の話は、日本でもいくつかの論文や著作等で報告されているが、その詳細については情報も乏しく、佐々井上人の関与などについては全く触れられていない。この位田師の報告は、デリーの国立博物館に安置され、全世界の仏教徒の信仰の対象となっている仏陀真身舎利の発見にいたる由来を記した貴重な記録である。

(関係文献)

『Kapilavastu in Basti District of U.P : a reply to the challenge to the identification of Kapilavastu』

K.M.Srivastava

Nagpur Buddhist Centre, 1978



デリー国立博物館蔵真舎利

高野山大学講義

「なぜ今インド仏教なのか？」講演録

6月20日於高野山大学



添田隆昭大僧正（高野山大学学長）

佐々井秀嶺上人はインドに渡られ、長年インド仏教の復興運動に取り組み、不思議な巨大な鉄の塔に出会った。

近づいてみたけれども、周りにはある種のバリアが張られてあつて近づくことができない。そこで胡麻の実をお加持いたしまして、それに念力を込めてその場で投げた。そうしたらそのバリアが解かれて、そしてその塔の中に入ることができた。

外から見たらちゃんとした形をとった鉄の塔でありましたが、中に入ってみたらそこは無限空間だった。大日如来様がおられて、そこで金剛薩埵や普賢菩薩等々の大菩薩を前にして、密教をお説きになっておられた。その場所に陪席することによって、龍猛菩薩は大日如来様から密教を授

かった。それによって密教という教えが人間の間に広まるようになったんだというのが、非常に重要な私どもの伝承であります。

弘法大師様は高野山をお開きになりますときに、赤い朱塗りの塔・根本大塔をお作りになりましたけれども、実は弘法大師様以前の塔は皆、三重塔にいたしましたも五重塔にいたしましたも、真ん中にこう心柱があります。

これは心柱を中心として屋根を作っていくという構造になっているのですけれども、根本大塔は全くそれと違った構造を採っています、既にご存知のように、真ん中が空間になっております。そこに大日如来様がおられるわけでありすけれども、実はこの根本大塔は今お話ししました龍猛菩薩が開いた「南天の鉄塔」、南インドにありました鉄塔を模して、この中に入ることによって、かつて龍猛菩薩が大日如来様から密教を授かったのと同じように、あそこに入る人は大日如来様から直接密教を授かることができるんだ。

そういうことを高野山において実現するために作られたのが根本大塔でありまして、そのモデルになったのが南インドにありました鉄の塔、鉄塔であるという風に伝えられておりまして、実は今佐々井上人様は、この「南天の鉄塔」の再建・発掘ということには取り組んでおられますので、そういうことに関してはこれからお話を聞かせてもらえるものと思います。では、どうぞよろしくお願いします。座ってどうぞ。

佐々井秀嶺上人

俺はいつも立って話すんだよ。いつもね、私は立って話します。というのは、アンベードカルという人はね、インド仏教の復興を成し遂げた人なんです。

吾々は「大菩薩」という、単なる菩薩じゃなくて「大菩薩」と呼んでいます。こちらの人は「何だ？どこの人だ？銅像はあるけれども、大学の前にね、銅像はあるけれども、この人はいったいどこから来たんだ？誰が建てたんだ？」と誰ひとりとして詳しく知った人はいないのではないかと思うんです。

そこで、この人こそ全日本においても、未だどこの聖地にもどこの公園にも、どこの山の上にも立っていないただ唯一、遍照金剛・弘法大師空

海上人のこのみ山に、しかも大学の前に立っておる。

この人はかつて座って改宗したことなどない。60万の人を一度に改宗した。1956年10月14日、一挙に60万の人を改宗しました。

お釈迦様はブッダガヤーでお悟りになられて、そしてそのお釈迦様のもとで一緒に幼年時代を過ごされた…。

お釈迦様は出家したものでから、一緒に出家して苦行をして、苦行をして、苦行をして、お釈迦様は途中から「苦行をしても、本当の正覚は、正しい悟りは開かれない」ということを自ら感じ取られて、スジャータというムチリンダ龍王の娘さんから、現代の牛乳のエキスですね、エキスというものをいただきました。しばし体力を回復なされて、それから尼連禪河をずっと渡って菩提樹があつた、それから。

そこで正覚を悟られて、これからサルナート・鹿野園、鹿がいつも遊んでいる、遊行している現代の春日山みたいなそこに行つて、5人の道友が「昔、私と共に修行したけれども、私が苦行をやめて、私に愛想を尽かして、現在は鹿野園で相変わらずの苦行をしている」ということを聞いている。ならば、まず最初に元、私と同朋の共に苦行をした5人の昔の仲間たちに、私の悟った境涯を教えよ」ということで、ブッダガヤーから鹿野園まで、現在は観光バスで行くと7〜8時間かかります。

遠いですが、ブッダガヤーから。そういうお釈迦さん。ですから、その5人の人に教えをときましたが、アンベードカルはこの20世紀、末法の世に、まあ「末法」というのはいろいろな経典に示されていますが、正法500年、お釈迦様が亡くなってまあ500年くらいは、お釈迦さん当時の仏法が正しく広まり、坊さん方も戒律を正しく守っていく。民衆たちも信仰していくという時代。

ところがその後500年は像法の時代。「像法」というのはただ寺が建つとか、坊さんが大勢増えるとかするけれども、仏法が徐々に衰えていくという時代です。

そういう、時のチャクラですね。カラチャクラといいます。これはチベットトのチャクラですが、時の宝輪が流れて仏滅2500年後には末法の時代になると。

もう坊さんおられます、寺もあります。近いところに経典は広まります。しかし、それを心から受け止めてゆく者は一人もいない。互いに争い、

坊さん同士が争う。仏教同士が争う。また多神教徒が来て争う戦乱の世の中というのが「末世」という時代である。

まあ今現在ですが、あらゆるところで戦争が行われております。日本の青年が「日本国は危ない」といつてナグプールに来ます。「あれ、日本国が危ない！我々の行く末はどうなるんでしょう？」と、若い青年たちがそういう末法の時代。

そういう時代に来るから、その末法の時代に60万の貧しい貧しい貧しい人に、アンベードカルという人は、上は憲法を起草したり、現代全インド民族は、アンベードカルの起草した憲法というものを、バラモンであれ上層階級であれ、承認であれ軍隊であれ、あるいは乞食であれ、皆仏教徒のように低頭合掌しなければならない。そういう「非人間」だ。そこから持ち上がって、最威光の憲法を起草している。奇跡といえば奇跡です。そのアンベードカル、60万の人を一挙に改宗せしめた。このように立って。それ以降、アンベードカルは地方を巡礼するんですが、決して座っていません。

私はそのアンベードカルの立つ姿、ということは闘争する姿、布教・伝道する姿という姿があるんです。立つ。

だからアンベードカルは、自分が立って改宗をさせて、これは坊さんが改宗させたくない、ただアンベードカルとそのご夫人がビルマの長老、現在はミャンマーといいますが、ミャンマーの大長老、93歳の長老をナグプール、私のところ、ナグプールに呼んでこられて、それを師として自分と奥さんがまず改宗した。

どういう改宗をしたか？仏教徒として断じて守らなければならない五戒文、日本にももちろんありますよ。日本の人は、坊さんが大勢おられるけども、失礼ですが申し上げます。

日本の人は果たして、不殺生戒、不偷盗戒、不邪淫戒、不妄語戒、不酤酒戒を守っている人は、まずいないと思います。

それをビルマ・ミャンマーの大長老より受戒しました。そして受戒した後、お坊様がチャンドラマ二さん、後で椅子に座って「座ってください」「椅子に座る？いや」。そのとき皆5人の坊さんが、5人ともはるか彼方、もう後ろに座らせている。

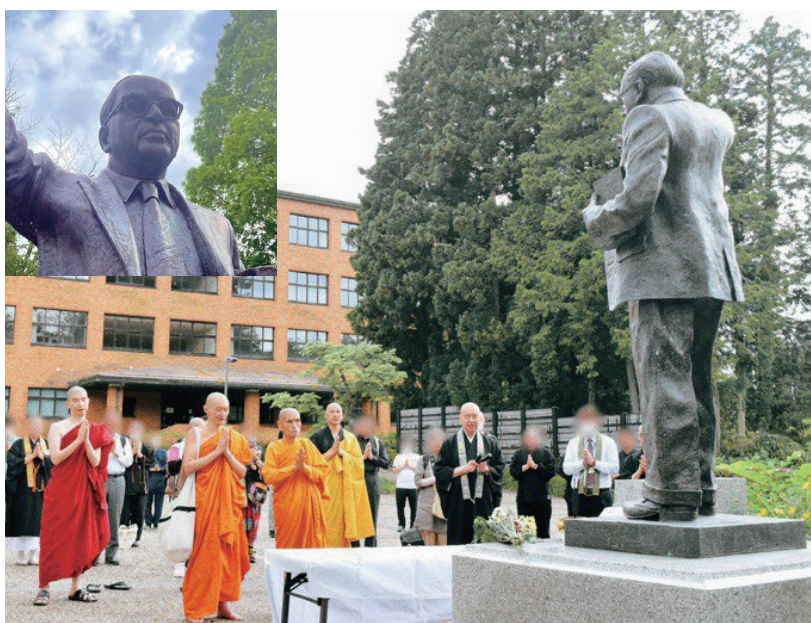
そしてアンベードカルは自分みずから仏教徒になった。自覚と信念だ。

わずか10分も経たないうちに、自覚と信念をもって、前にあったマイクを持って、山だかりの大勢の民衆がおりますから、「私について来る者は手を挙げてください！」ハーローツと…。

とにかく、それで仏教の「ふ」の字も知らないような段階なんだ。ねえ。「仏」が何であるか。戒律がどういうものであるか。経がどういうものであるか。仏様がどういう生涯を送ったのか。それも知らない貧しい民衆の中に、「バラモンの人もおったの？」と思われるでしょうが、最高裁判所の判事などもそこで一緒に深く知ったのだから。バラモンの人も。そういうような60万の人たちが、一緒に手を挙げた。そしてアンベードカルは「五戒の文を唱えなさい」と。

Pañāpāṭa veramani sikkhā padam samādhīyāmi

私たちはいかなる生き物も殺さないように、というまあ日本で言えば「不殺生戒」ですね、をよくたもつというね。それから次は、



Adinnādāṇa veramani sikkhā padam samādhīyāmi

「不偷盗戒」、盗みをいたしません。まあ、今ものすごい手癖の悪いやつが(?)多いんだ。これは守っていません。しかし、本当の仏教徒は「不偷盗戒」を守っていると私は信じている。仏法興隆の先頭に立っている私には、その真剣な態度、仏教徒の成長がね、学生・女学生すべての姿は大僧侶、ねえ。

Kāmesu micchacārā veramani sikkhā padam samādhīyāmi

「不邪淫戒」、邪な思いを抱かぬこと。「不邪淫」だ。女に対する考え。邪な思いを起こさないこと。

次は「不妄語戒」。

Musāvādā veraman i sikkhā padam samādhīyāmi

「不妄語戒」、嘘をつくなどということだ。嘘をつくのが一番やっちゃいけないんだよ。こつちのことをあつちに告げ口するような、そんな裏切り行為をするようなことを言っはいけない。

最後が「不酤酒戒」だ。

Surāmeraya Majjapamadattāṇa veramani sikkhā padam samādhīyāmi

酒を飲んではいけない。皆さん、男も女もみんな酒を飲んでるんじゃないかと思うんだけどね、まあ。ところがインドでは酒を飲むのが、インドの酒はあまり(良くなく)、頭が痛くなるんだ。倒れるんだ。日本のように澄んでる酒じゃないんだ。病気になるんだ。頭が変になるんだ。だから、一切の戒律を破る原因は酒であるということなんだ。酒を飲むと暴力になる。女を、人を殺す、傷つけ。酒を飲む人は嘘をつく。こつちのことをあつちに言ったり、告げ口したりして嘘をつく。さらには女の人を悪くする。「不邪淫」です。

妻を裏切る。それから盗みをする。酒を飲む人はそういうことやるんだ、全部。信頼されない。いかに善いことを素面の場合に言っても、酒を飲む人は信頼されない。

そういう五戒文を唱えて、アンベードカルは仏教徒になっている。だから、それを60万の…。自分で改宗させた。

さらに今度はアンベードカルの戒律というものがあるんだ。これが大事なんだ。アンベードカルが仏教徒に課した大戒律があるんだ。22の誓いです。



「私はヒンドゥーの八百万の神々を拝みませんよ」と。また「信仰もしません。なぜならば、神々ならば皆、大慈悲を授けてくださる。大智慧を与えてくれる。大『道しるべ』を与えてくれる。そういう神ならば信仰し崇めるけれども、吾々を『不可触賤民』という名前で『穢らわしい人間』にする。」

人から地獄の底にまで突き落とされるような民衆。かの仏教徒も、大部分のインド人も突き落としたのは誰ぞ？『神』だ。そんな『神』が『神』と言えるか！』とこうなるわけです。

そこで、「そういうヒンドゥーのいかなる神々に対しても、私は信仰しませんがしお布施もしません」という戒律。仏教徒に対してだよ。それから「仏教徒になったからには、私は仏教の言いつけを守り、教学を勉強し、そして正しい仏教徒として立ち上がります」と。

仏教徒の誓いが半分。ヒンドゥーの神に対する訣別の誓いが半分。2分の誓いになっております。これでアンベードカルは60万の人を仏教徒にした。

そういうことでアンベードカルは釈尊以来。釈尊は5人の同志に転法輪したと。ところがアンベードカルのダンマチャクラ・パリヴァルタン（転法輪）。「パリヴァルタン」は変えるということだ。「プラヴァルタン」（転法輪）できるのはブッダ、釈迦牟尼仏しかない。仏教の故事だ。

パリヴァルタンというのは大乘戒にて、新しい転法輪をするということだ。アンベードカルの転法輪。ダンマチャクラ、法輪を革命したように転ずるという「革命転法輪」だ。それを「ダンマチャクラ・パリヴァルタン」という。「プラヴァルタン」ではない、「パリヴァルタン」。それをやった。

だから、そういうことを座って講義するようなんじゃない。立つて講義するんだ。「ジャイビーム」というのはアンベードカルのことです。吾々はなぜ「ジャイビーム」と言うのか。というのは、アンベードカルの幼い頃の名前は「ビームラーオ」ババサーヘブ・アンベードカル：「ビームラーオ」という名前を取って（「ジャイ」ビーム）と言うんです。

「ジャイ」というのは「バンザイ！」とか、「勝利である！」という言葉の意味が込められている。だから、そういう教学を受けたアンベードカルの直伝仏法。謂わば教主・釈迦牟尼仏、人間ブッダの教えを、現在は末法だから。末世の仏法。「正法なんてない、像法もない」と釈尊がよ

く言っている時代だ。

現代の世界戦争はウクライナを見ても悲痛極まるものを見つめる。そういう時代には「替え玉」仏法。ブッダの教えであることには違いない。だからアンベードカルは「ダンマチャクラ・パリヴァルタン」。こういうことになっております。

ですから、学長様が「南天の鉄塔」ということを言われまして、「南天の鉄塔」について話すようにというような注文のように聞こえたのですが、私は数年前、（高野山）大学の講堂をお借りして、ちょうどそのときは今の学長さんは宗務総長という大役におられました。その宗務総長様のご臨席を仰いで、傍に座られ、また近藤堯寛といつて、般若心経やいろいろなことについてわかりやすく書いて「布教随一」と思われるような、近藤堯寛大和上様にもご臨席いただいて、その前で「私観」―自分で観じる―「私観南天鉄塔」という、あまりにも畏れ多い題にて、わかりにくい仏教用語・表現で、難解な南天鉄塔について講演させていただいたことがあります。

今回はそんなことでは済まぬ。アンベードカル菩薩の像がある。アンベードカル菩薩とはいかなる人か？現代の仏教徒はどう育っていくか？これを私は話したいということでもりました。

難解な仏法については今度、京都の仁和寺に行きます。南天鉄塔について話してほしいということで行きますが、今回、この場では：現代の仏教徒は堂々たるものです。私は56年、ナグプールにおります。40年間は一歩も母国日本の土を踏んでおりません。

40年間戦い、しごかれ……。大体その頃は、（インド仏教徒らは）日本という国を知っていなかった。チャイナ、チベット、ネパール。だから俺は当初「チベット」と言ったりしていた。「お前どこから来た？」「チベットです」。「お前どこから来た？」「ネパールです」。「チャイナです」。

ちょうどその頃、インドと中国が戦争しておった。石を投げられたり、リキシヤーをひっくり返されたり、法衣を剥ぎ取られたり、血だらけになったことも少なくない。

しかし「私を呼んだのは誰ぞ？」と。八宗の御祖師・龍樹菩薩。真言密教で言いますれば高祖・龍猛菩薩が「汝、南天龍宮城に行け」と。龍樹菩薩が現れたんです。

龍樹菩薩が現れて「汝、速やかに南天龍宮城に行け。南天龍宮城はわが法城である」と龍樹菩薩が言うんです。「吾は龍樹なり。汝、速やかに南天龍宮城に行け。南天龍宮城はわが法城。わが法城は汝が法城。汝が法城はわが法城。汝、速やかに南天龍宮城に行け。南天鉄塔またそこにある」と、こう。

私はもう、そんなことを聞く余地はない。目の前に髭相白髪の：白髪ですよ。満月の夜、ところは中天竺・王舎城。靈鷲山よりちよつと上の多宝山。法華経の多宝如来が現れたところ。その根本大塔は多宝如来塔ともいうと聞いております。日本で一番最初に多宝如来塔を建てられたのは、確か弘法大師様だったと思います。

その多宝如来が現れました多宝山の頂上です。満月の夜に現れた。王舎五山、五つの山があります。（龍樹菩薩は）大音声を備えて、別世界のよう

に満月が輝いています。時間は午前一時か二時頃だ。「バシッ！」と。「私は王舎城でストゥーパを建てるお手伝いをさせていただきました。ありがとうございます。これで私の仕事は終わりましたので、これより日本に帰って高尾のお師匠様のお側に仕えて、師に対するご孝養をさせていただきます」と思つて帰りの切符も買い、タイに寄つて日本に帰る予定でおりましたので……。

「汝、速やかに南天龍宮城に行け」。だから、その髭相はあまりにも真っ白だ。このあこ髭。こんなごま塩じゃなくて、長い髭相なんだ。刀とも見えない、杖とも見えない何か長いもので「バシッ！バシッ！」と。一寸の身動きもできない、肩を押さえられているから。

徐々に変わつて、もう汗がダラダラだ。恐ろしさで、こんな経験をした俺は、もうダラダラダラダラ……もう水のように汗がダラダラ。それで、そういう状態の中で金縛りに遭つて、私は恐れおののき震えておりましたが、声は不思議と、きちんと入ってきたんですよ、お告げが。

「汝、速やかに南天龍宮城に行け。南天鉄塔またそこにある」と。その声も恐ろしい。恐ろしさの余り、「南無仏、南無法、南無僧……」と一生懸命唱えて、ちよつとした身体がスーッと軽くなった。

見ると現れ出たる、その白髪の勇壮なるご老体が忽然と消えた。即ち、龍樹菩薩が消えてなくなつたと。そういう奇瑞をいただいた。日本に帰るところじゃないよ。申し訳ないが「高尾のお師匠様！私は天の声に……」

また「龍樹菩薩が現れたんです！もう私は日本に帰ることができないんです！どうかお師匠様、許してください！」。

私の人生はそのときに90度（ママ）転回して、そして私はどこともわからないナグプールというところへ…。「ナーガ」というのは「龍」、「プール」というのは「龍宮（城）」とか「城」とか「大都市」とか訳します。そういう場所に、ヒンディー語もあまり覚えておらん、英語もよくわからないごく普通の、佐々井秀嶺という一仏僧が行ったのです。叩かれるのは当たり前ですよ。蹴られるのも当たり前。

そういうこと入って、叩かれしごかれ、それでも仏教徒は何も知っていないんだ、教理も。ちょうどボーディサットヴァ・ババサーヘブ・アンベードカル博士が亡くなってちょうど10年目。私は南天龍宮城に到着したんです。

南天龍宮城といえば皆さんは、まあ浦島太郎ですか。わかってないだろう、私などもそうでした。ところが、「南天龍宮城に行け」と日本語で言うんですから、龍樹。それでナグプール。今のナグプールの市印は、高野山の寺紋は五三桐ですが、この市の紋が蛇なんです。降々と角の生えた、足の生えた、毛の抜けた、そんな角：豪壮の龍ではなく普通の蛇です、市の紋は。ナーガです。

その紋が現在、私のいる龍宮：ナグプール市の。龍種、文殊支利菩薩の前生を龍種上尊王如来といいます。文殊支利菩薩。大乘では普賢・文殊が脇侍仏ですから、お釈迦様の。

その文殊の前生が龍種上尊王如来。龍種の上尊、マンジュシュリー。マンシュリー、マンシー…というものが、今私がおる…発掘した（マンセル遺跡の）原語なんです。

ですから、その「南天鉄塔」を元に、そこで私は11年間発掘しました。金剛界、密教の大道場をシルプールでは発掘しました、3年間。

現在、全インドにおいて金剛界の大道場はシルプールというところを除いて、ほかにはないということ覚えておいてください。

オリッサには5つの山があります。そこは密教の道場でもあります。しかし五鈴、三鈴、独鈴を持った仏像は、わずかしこにはありません。ところが、シルプールには84仏が、こーんな長い（遺跡）…ここを前にして発掘されたんです。ここを前において、密教の仏・菩薩が84体もシ

ルプールから発見された。それを発掘、完遂した。

まだまだ掘らなければならないところがあるが、私の11年間で大体、密教の核心は掴めた。あるいは本山でも総本山でも金剛界を重んじる瑜伽塔。こういうものがあるんです。瑜伽塔、これが南天の鉄塔だと思えばいい。それがシルプールにあるんだ。密教の大道場が。このことを観じなければなりません。

それで私は55年間、ナグプールにおいて、仏教の道場。世界仏教の根本道場。世界の仏教徒の全総本山、ブッダガヤーの…。私は管理委員会に16年おりました。2、3年ですよ、普通は。だけでも私だけは16年間。

ビハール州首相に「辞めさせてください」と言ってもみた。今は辞職されている方ですが。そのブッダガヤーの大塔をインド仏教徒の闘争だよ。アンベードカルはこう言っています、「勉強しろ」と。日本では福澤諭吉が『学問ノススメ』ですが、「勉強しろ」と言っております。

アンベードカルは言っています。「私を磨き上げたのはインドではない。『私は人間である』と自覚したのはインドではない。外国に留学したからである。学問したからである。大学院に行ったからである。イギリスに行ったからである。外国は『アウトカースト』などと私を扱って差別をしてはいない。インドだけだ。このアンベードカル、私を差別して『非人間』と動物以下に取り扱ったのは。だから何としても勉強してくれ」と、アンベードカルは叫びに叫んで「勉強しろ」と、「親が三食たべているなら、一食たべなくてもいい。子供たちを食べさせろ。親は二食たべれば十分、一食減らして子供たちに食べさせてくれよ」と。

「そして、子供たちの頭を健全に育てるんだ」と。「身体を健全に育てることにしてくれ」とアンベードカルは言っております。「健全な肉体には健全な精神が宿る」という日本の（ママ）言葉にもあります通り、アンベードカルは「学問しろ」と。だからインドの仏教徒は、親がリキシヤーを引いて、または重労働して石や土を運ぶ仕事をして、田植えをする仕事を手伝っても、皿洗いを婦人がしても、「子供には十分教育をさせなきゃいかん」と言っでどんどんどんどん…。

今はどうなっているか？仏教徒が第2位だ。私はインドの政府によって、マイノリティー・コミッション（の仏教徒代表）に任命されました。任期は3年間。ちよつと大袈裟ですが、謂わば副大臣の資格ですね。ピカ

ピカに光った車に乗ってね、ブーツと回るんです。

そういうものに、3年間任命された。マイノリティーとは誰であるか？仏教徒、キリスト教徒、回教徒。それからヒンドゥー教徒もおるんだ。「ヒンドゥー教はマジョリティーじゃないか？多数派だ」というかもしれないが、カシミールはインドの境、パキスタンの近くだ。あそこではヒンドゥー教徒は迫害されている、回教徒に。「これがマイノリティーだ」と言うんだ、都合のいいように。

このマイノリティー・コミッションに私は入りまして、3年間やった。ところがあるとき、宗務庁に「挙にダーツとやってきて「ササイ・ジー。ちよつと質問したいことがある」「何ですか？」「仏教徒は教育で、インドで2番目だ」と言うんだが、これは驚きだ」と。「あなたは仏教徒の代表で、マイノリティー・コミッションに入ってるんだ。どういう訳で仏教徒が、インド民族の教育第2位に持ち上がったのか？」

従来、仏教徒（となった元ダリット）には「教授できない、教授させてはいけない。もう愚か者で貶められて、見るも汚らわしい、聞くも汚らわしい。影を見るのも汚らわしい。そういうヒンドゥーの中にあつて、「教育の1位は何だ？」と訊くと「キリスト教だ」と。

キリスト教は巧いよ、教育が。仏教ではない、1位はキリスト教。日本でもキリスト教は教育が巧い。そして2位が仏教だ。読むことも、学問することもできなかった民衆、子供たちが第2位になっていると。

第3位がシク教、ターバン巻いた。4位がヒンドゥー教。5位が回教徒。そういう順位の中「仏教徒は何で不可触民だったのに…」「馬鹿野郎！」「不可触民」じゃねえや。仏教徒と言え、仏教徒と」と怒鳴って。

「何で？」「当たり前だよ。仏教徒はね、アンベードカル菩薩が偉いんだ。学問のすすめによって0歳、幼稚園。2歳、3歳、4歳：幼稚園から小学校。小学校から中学校。高等学校、大学。大学院まで行っているんだ。日本では大学に行っているやつもいれば、いないやつもある。私はもう普通：一才の学問をやっていないけれども。ねえ。

そういうところに入れたかったんだよ。アンベードカルは自分、自ら体験しているんだ。一生懸命勉強して、そして外国に行つて…。その頃、外国に行くことは許されなかった。しかし藩公がおりました。こちらでは殿様という。何々藩：私は岡山藩、池田藩、鳥取藩とかね。薩摩藩と



かある訳で、向こうにもあった。

その藩公の一人に偉い人がおつて、「アンベードカルは頭がいい。あいつを外国に留学させろ」と藩公の金をもらつて、アンベードカルは行き、学問したと。

その頃、誰一人として「不可触民」といった「非人間」の「非人間」の「非人間」につくとされた人は、外に出ることがなかった。まあ藩公は崇められています。アンベードカルを外国に遣つたということで。

それで、アンベードカルは外国で力を蓄えて、それから帰つて仏教徒への道をひた歩くのですが、そのように仏教徒の人たちは貧しいながらも皆、向上している。

今では多くの人が時々旅行に来ます。「コロナが終わつた、解除された」と。「コロナは3年過ぎました。解除されました」と。

「旅行に来ました」「何のためにインドに来たんだ？」「解雇されました」。それで旅の途中に私のところに寄つて来ましたと。「お前、俺は坊さんだ。お前は日本から来た。日本には仏教がある」と。

「何宗だ？」「いや、うちはおじいちゃん・おばあちゃんが念仏をしってたよ。しかし、俺は無宗教だ」とこういう奴がいっぱいおる。「いや、私は全然、無宗教だ」と。(そもそも) 坊主・葬式が違う。普通は無葬式でやつてるんだから。そんな奴ばかり来るんだよ、今は。何てことになつてんだ？？ねえ。

それで「俺の行く末がわからん。どうしたらいいんでしょう？どうなつたらいいんでしょう？」。泣きながら話すんだ、泣きながら。そういう奴がうろついて、ナグプールに来るんだ。

この間も、東京で人生相談をやつた。岡山・長泉寺でもやつた。50人、一挙に来た。もう、自殺を5度もやつたという女の子が来るんだよ。3度もやつたという男も来るんだよ。「全身やけどをして、もう生きる力が無いんだ」と。「どうか、インドに行つて坊さんになつて来るから、インドに置いてくれ」と。「もうお父さん・お母さんも『早く死んでしまえ』と言つて責めるんだよ」と泣きながら言う男の子もいました。

私は一々真剣に、私も泣きながら…涙くと鼻水が出る。鼻水を出しながら、泣きながらお答えしました。「泣きな…」抱き合つて泣きました…人生相談。泣きながら、抱き合いながら「頑張れーッ！頑張れ」と励ましました。

そういう人がいっぱい、今日日本にはおるんだ。

これからもなお、予想するだに頭が痛い、たくさん予定があります。仁和寺は南天鉄塔だ。その後、佛教大学で若い人々との対話を果たするんだと。いろいろと仏教のことについてお話しすることになっています。

大体、時間になりましたね。そういうことですから皆さん、インドの仏教徒は「お前、将来何になるか？」と聞く、私はパイロットになります。「お前は何になるんだ？」「ドクターになります」

「お前はなに？」「警察官」「社長になります」「私は兵隊の偉い人になる」「医者になる」とかと言つて、しかもみんな速いんですよ。問われれば、もう即座に答えが返ってくるんだ。小学生の頃から。

日本の青少年にそんな人は一人もない。もう「自分の行く末がわからん」どうしたらいいんでしょう？どうしたら？？」と迷っている。ねえ。

インドの仏教徒は立ち上がっています。それから、ここにアンベードカル像がある。今、学長さんが言いましたが、(インドの) 大使様がね、ここにお参りに来て「高野山にお参りに来てください」と言っているようです。アンベードカル像があるから。インドの大使がだよ、変わる度に来ると言う。昔は来ていなかったでしょう。しかし今、仏教のレベルがぐーんと上がっている。いかなる軍隊にも屈しません。いかなる論戦にも仏教徒は屈しません。インド憲法が各家庭に1冊づつ置いてあります。バイブルだ。憲法をバイブルにする家庭が、日本にありますか？それから、「ブッダとそのダンマ」。アンベードカル的に書いてあります。それはインド仏教を向上させ、皆に仏教を伝えるアンベードカル思想がこもっています。闘争。今仏教のあるべき姿。インドネシアは以前、全部仏教徒であつた。今、インドネシアには仏教徒はいない。全部回教徒だ。

マレーシアは以前、全部仏教徒であつた。今は回教徒になっている。タ일랜드はどうか？ラーマ10世。民衆に支持されず外国に住んでいる。それで、大部分の支持で国会議長が回教徒。首都バンコクの郊外は、万回教徒だ。寺はどんどん。やがてはタイ国の仏教もなくなっていくのではないかと心配しております。

ミャンマーもそうだ。一体、仏教はどうなるのか？「こうなる」とアンベードカルはこう言っています。「勉強しましょう」と。それから「團結しろ」。勉強したら、自分のためにだけに働くんじゃない。團結するんだ。「闘争せ

よ。「闘争」という文字は、各世界の仏教徒にない。

チベットのダライ・ラマさんも亡命してきました。ミャンマーさんも困っています。ですから「闘争しろ」。これが仏教徒の「ジャイビーム」です。「ジャイビーム」とこう言えば…『ジャイ・ビーム』という映画が、日本でもちよつと流行つたようですが、「ジャイビーム」というこれが闘争。インド仏教は…。マレーシアやインドネシアや、タイ国やミャンマーや、ベトナム、カンボジアの仏教が衰えて、日本の仏教も段々と衰えておる傾向にある！

だが、インドの仏教徒は「絶対偉い」と言つて、行く仏教です。闘争の…仏教。これがインドの仏教徒の現実であります。

まあ、そういうことですから皆さん、頑張つてくれ！仏教徒として自覚・信念を持って、闘争ということを考えてみたらどうですか？

「仏教徒は『不殺生』だから闘争しない」？俺の師匠、山本秀順現下は戦争中に闘争した。果鴨の刑務所に囚えられて拷問を受けた、叩かれた：350日牢獄で暮らした。

ねえ：銃殺。憲兵に引き立てられて、いつ銃殺されるかわからなかった、もちろん。秀順大和上、ねえ。しかし、泰然として壁が黒くなるというほど坐禅したといひます

そういう風に：闘争。師匠は戦時中に闘争した。私もその弟子であります。師匠のそれを承けてインド仏教復興のために、今までやってきた。今からもうやります！「南天鉄塔とは？」という問題を解決…。

ボーディダルマへの言及のある真言密教の楞伽經の文を、弘法大師が大分引用されて『即身成仏義』とか、いろいろに書いております。だから、禅の管長と真言の管長様があるとき、お互いに話し合つたという記録が残されている。そういうことなので禅と真言は別な相だけれども、瓶から瓶へ移したのです。こういう相承の違いです。

ですから、そういう…皆さん、真言密教あるいは各宗の教学を勉強して、「日本国を守るんだ！日本国を守り抜くんだ」と。また戦前派だけれども、申し訳ありません。そういう気持ちになつていただければありがたいと思います。

ビッグブッダ・プロジェクト

アンベードカル博士国際教育センター建設計画



日本在住のインド人仏教徒の連帯組織 B.A.I.A.EJapan のメンバーが企画、佐々井上人が会長となり、在インドの NPO「アーリヤ・ナーガールジュナ教育協会」が設立され、ナグプール市の郊外ラムテークに「アンベードカル博士国際教育センター」を建設するビッグブッダ・プロジェクトが始動しました。

BAIAE メンバー、バルマセ氏よりプロジェクト概要を頂きました。

Thank you for your co-operation.

As per our discussion regarding the information related to purpose of this project:

Core objectives of this projects:

- 1) Create international Buddhist Platform to promote education and culture
- 2) Set up an education center for the upliftment of marginalized sections of society to prepare them internationally competitive.
- 3) Develop the area around the monument having Buddhist historical importance.

Phase 1) Guest House

Purpose:

- 1) To construct such a big project, It is needed to stay someone at the construction site.

for taking care of this site security.

- 2) When any national or international guests visits this site, then it is needed a place where they can sit, understand the project.

Communicate with project persons and have some meeting and can able to stay for some days at site.

Uses:

- 1) As name indicates, It is a house for guests those are coming from Japan.
- 2) It will be use as a 24 hr. staying facility for a security guard.
- 3) Hall will be used for some small meetings or programs whenever it will be needed.
- 4) In general days, some portion of hall will be using for library & study place for students
- 5) Some portion of hall will be use as a Japanese language training center for students
- 6) Some portion of hall will be use as a Skill development training or CAD training center for students.

Phase 2) Dr. Ambedkar Education Center:

Purpose:

- 1) As in India, now a days, getting a job by everyone is a big problem.

now a days most of the students are taking an education until collage graduate, but in the ratio of graduate candidate's, jobs quantity are less.

It means, if any plus alpha additional skill will be there in any candidate, then he is getting a job. Otherwise, it is difficult to get a job for college graduate with only graduation degree.

So, in this education center those kinds of additional skills will be teaches, so that a candidate can get a job as per his educational background and additional skill.

Also with this additional education, He may set up his own small business or with his international language ability he may can go to other countries like Japan for Job or higher education.

Uses:

- 1) This education center is having three main areas. Please check attached file for it details.

I think this kind of information you need which I understood from our telephone call.

Please let me know if any other information you needed.

Thanking you.

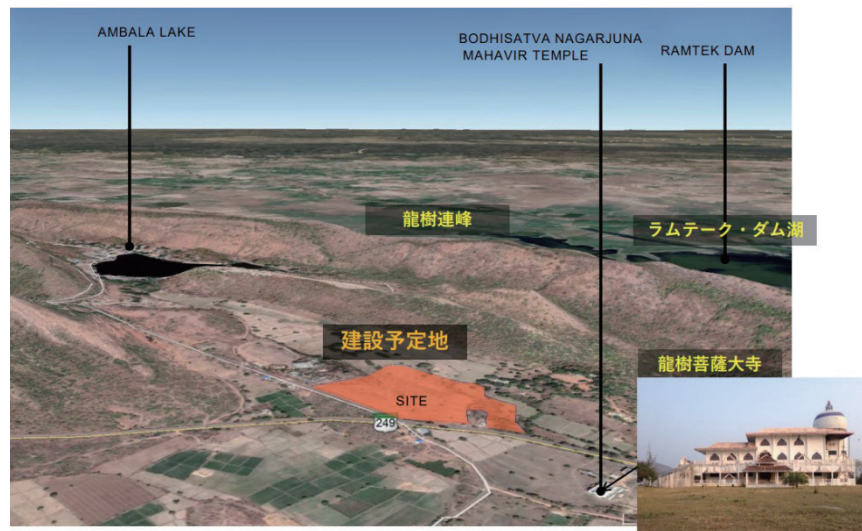
Regards

【目標】

1. 教育と文化を促進するための国際的な仏教プラットフォームを構築する。
2. 社会の疎外された人々が国際的に競争力を持つようになるための教育センターを設立する。
3. 仏教の歴史的重要性を持つ記念碑の周辺地域を開発する。

建設予定地

ナグプール市内から車で1時間
佐々井上人のお寺龍樹菩薩大寺に
隣接する土地
敷地面積 50,800m²
龍樹連峰の南麓、
西5 kmにはマンセル遺跡



フェーズ1 ゲストハウス

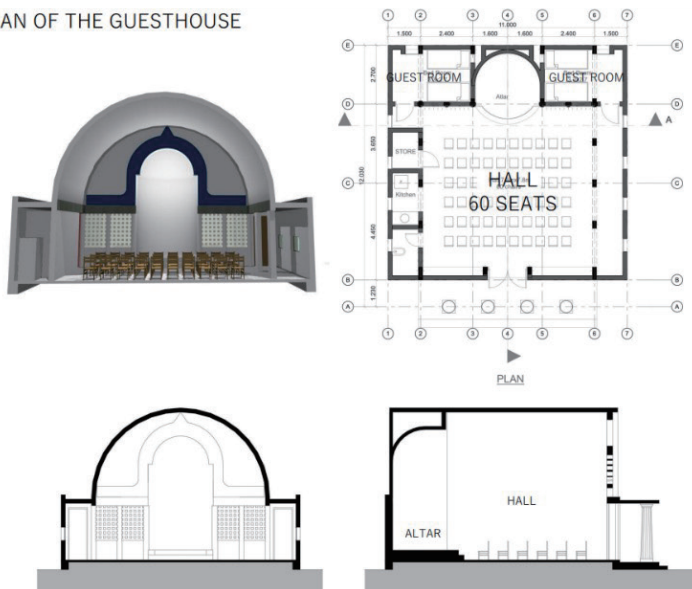
【目的】

1. このような大きなプロジェクトを構築するには、建設現場に誰かを滞在させる必要があります。このサイトの安全を守るために必要です。
2. 国内または海外のゲストがこのサイトを訪れるときは、彼らが滞在して、プロジェクトを理解できる場所が必要です。プロジェクト担当者と連絡を取ったり、打ち合わせを行ったりするために、現場に滞在することができます。

【施設の用途】

1. その名の通り、日本などから来られたお客様のための宿泊施設です。
2. 24時間滞在施設として利用します。
3. ホールは、必要なときにいつでも、小さな会議やプログラムに使用できます。
4. それ以外の日は、ホールの一部は学生のための図書館や学習場所として使用されます。
5. ホールの一部を学生の日本語研修センターとして活用します。
6. ホールの一部は、学生の能力開発トレーニングまたはCADトレーニングセンターとして使用します。

PLAN OF THE GUESTHOUSE



ゲストハウス完成予定図

フェーズ 2 アンベードカル博士国際教育センター

【目的】

今のインドでは、若者が仕事に就くことは大変難しく、大きな社会問題になっています。今はほとんどの生徒が大学まで教育を受けていますが、大学卒業生に対して仕事の量が足りません。一方で、卒業生になんらかのプラスアルファの追加スキルがあれば、彼は仕事に就く可能性が高まります。そうでなければ、卒業の学位だけでは大学卒業生の就職は困難です。そこで、この教育センターでは、卒業予定者が自分の学歴に加えて、追加スキルを身につけることによって仕事に就くことができるように教えます。また、この追加の教育により、彼は自分の小さなビジネスを立ち上げるかもしれませんし、外国語能力を身につけることによって国際的な仕事や更なる高等教育のために、日本のような国に行くことができるかもしれません。



【施設】

この教育センターには、大きく分けて 3 つのエリアがあります。

1、教室 / 講堂

NEET、JEE、MHCET、NET、ITI、UPSC/MPSC ※、その他の競争的試験（入学・資格・採用）のための、さまざまな授業や演習用の講義室。日本語、ドイツ語、フランス語などの外国語の授業。CAD/CAE、技術管理、IT、ロボティクス、AI、IoT の実習。

2、図書館

さまざまな競争的試験の準備のための専用セクション / 部屋を備えた多目的図書館。専用の デジタル・ライブラリー・スペース。

3、コミュニティ・ホール・文化、コミュニティ、仏教行事のための多目的ホール。ナーガールジュナ博物館。

※ NEET: 医科大学入学試験 JEE: 工科大学入学試験 MHCET: マハラシュトラ州の工科および医科大学の共通入学試験 NET: 教授 / 大学教員の全国資格試験。ITI: 鉄道職の資格試験 UPSC: IAS (インド高等文官) になるための全国レベルの採用試験 MPSC: 地区の長官になるためのマハラシュトラ州レベルの採用試験

プロジェクトをご支援ください

日本での支援窓口は南天会が承ります。

【金融機関】 ゆうちょ銀行 【加入者名】 南天会

【口座番号】 01380-0-90164

郵便局備え付けの振込用紙をご利用の際は、「ビッグブッダ・プロジェクト寄付金」とご記入ください。

※他金融機関からの振込用口座番号

【店名】 (イチサンキュウ) 一三九店 (139) 【当座】 0090164

智慧と慈悲の輪 高山龍智

去る10月29日(日)、首都圏某所にて在日インド人仏教徒の非営利団体：B.A.I.A.E.の主催による『第67回 転法輪祭(アンベードカル博士改宗記念祭)』が開かれました。



今年度は、コロナ明けの本格化ということもあってか、会場の確保がいささか難航し、結果「昭和の香り漂う」公民館での開催となりました。手づくり感に溢れた舞台装置は、あたかも彼らの祖父母が「マイナスから1を生み出した、仏教復活の往時を偲ばせるものとなりました。

まずは礼拝とパリー語勤行、次いで古参メンバーによる聖歌の奉唱。



続いて青少年代表のスピーチ。女の子が英語で「Now is the time when Buddhism is needed」を、男の子が日本語で「僕がアンベードカル博士を尊敬する理由」を、それぞれ立派に語ってくれました。



そして、厳粛な雰囲気から一転、インドといえばダンス。歓喜と法悦を全細胞で感じ取り、全身で表現する नृत्य (ヌリティア/舞踏)こそ、彼らの文化なのです。



——終盤、私の法話(ヒンディー)より。

「皆さんの故郷ナーグプールは、佐々井秀嶺上人のおかげで今や「インドの中の仏国土」となりました。北部のアーリヤ系、南部のドラヴィダ系、さらに北東部のモンゴロイド系が同じ地域に集まり、一つの信仰のもとに和合しています。

しかし、この世界は違います。

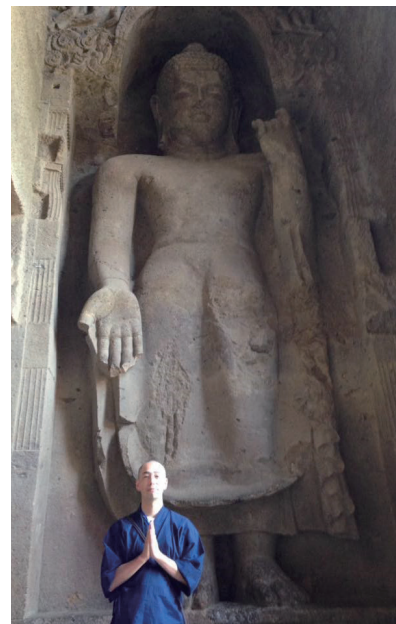
肌の色、民族、宗教の違いによって激しく対立し、いま現に戦争(युद्ध/ユッダ)を続けています。

私は、このように思うのです。いつの時代も人間に必要なのは、ユッダではなくブッダ(बुद्ध/智慧と慈悲の完成)なのだ、と。

そしてダンマ・チャクラ・プラヴァルタン(転法輪)とは、智慧と慈悲で世界を動かしていくことだ、と」



(高山龍智上人ブログより転載)



岩窟の仏教

佐伯隆快

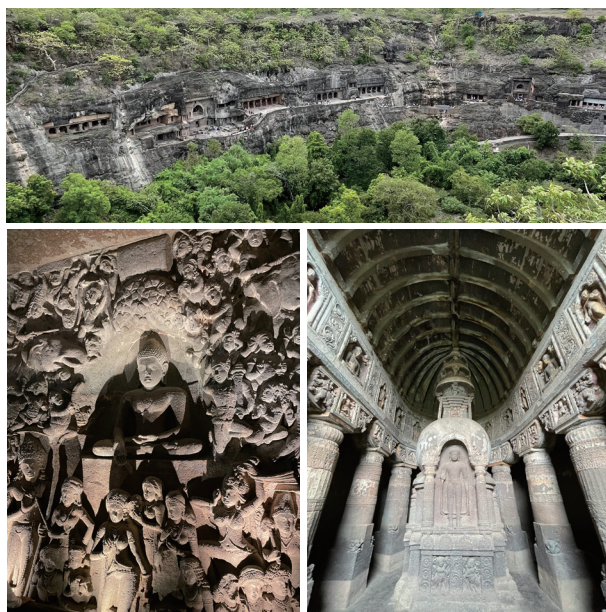
仏教といえば岩山を思い浮かべるといつても、あまりピンとこないかも知れない。しかしインドや中国の西域では寺院は岩山の中に開鑿され、仏像も仏塔もみんな岩の中を掘って表現された。昔NHK特集「シルクロード」で敦煌の映像を見て、その壁画や大仏のイメージが心に強く残っていた。バーミヤンの顔を削られた大仏も印象深かった。広島県の山奥のお寺から、はるか西域の砂に埋もれた石窟寺院を想像し、いつか行ってみたいと確かに思っていた。

大学で考古学を専攻し、「雲岡石窟の初期形態」というテーマで卒論を書くため、4回生の夏休みに友人と中国旅行をした。雲岡は素晴らしかった。第20窟の露座の大仏の尊顔は晴れやかで、曇曜五窟といわれる初期の巨大な仏像窟に目を見張り、こんなところまで来た自分が信じられなかった。中学生の自由研究に毛が生えたような卒論だったが、旅行記のような文章が面白いと指導教授に良をもらった。その後、敦煌やトルファンの石窟にも行くことが出来た。

この数年佐々井上人のご縁をいただいて度々インドに行っているが、ナグプールがあるマハーラシュトラ州は

仏教石窟の宝庫である。世界遺産のアジャンター、エローラをはじめアウランガバード石窟、カルラー石窟、無名だがジュンナルのレニヤドリ石窟などを訪れた。どこも壮大な遺跡である。インドにはこのような石窟寺院が1000以上残っており、そのほとんどが仏教窟で紀元前2世紀のアショーカ王の時代から後7世紀まで営々と仏教徒が暮らしていたという。卒論を書くときに、インドの石窟の歴史も一応勉強していたが、実際に訪れたインドの遺跡は想像をはるかに超えていた。仏教というものがこんな岩山の中で何百年も息づいてきたことが、仏教に対する私のイメージを変えた。

この10月11日にナグプールで行われた大改宗60周年記念式典に参列するために、またしてもインドに行った。今回は後半ムンバイに滞在し、世界遺産のエレファンタ島、ムンバイ北郊のカンヘリー石窟群を訪れた。アジャンターと同時期に開鑿されたカンヘリーは森林の中に隆起した巨大な岩盤に100窟以上の石室が掘られ、雨水を集める細工や酷熱を避ける工夫など見どころ十分。メインのチャイティヤ(塔廟)窟は、全山の礼拝堂のような厳かな空間で、私はその中の側面に造られた小さな僧坊に一人で入ってみた。中は人が一人寝ることが出来る石のベッドと明かりを置く窪みがあり、暗がりに目が慣れると正面の壁にぼんやりと一躯の仏像が浮かんできた。その顔はとても柔和なお顔であった。岩窟の中のさらに内部に一人いて心細くも思ったが、母の胎内にいるような不思議な安心感を感じた。ここに生きていた人々にとって、仏教はどういうものだったのだろうか。添乗員として同行してくれたクマールさんは「仏教徒は、戦争や差別の世間を離れてこんな山奥に生きる場所を造り上げたのです。」と言っていたが、そういう人々が暮らした空間が安心感につつまれているのは必然なのだろう。



アジャンター石窟寺院群

アンベードカル博士は、仏教とは「人と人との正しい関係」を説く教えであるという。争いを止め、正しい言葉正しい行い正しい考えをもって、信頼関係を築いていく。それが仏教徒の生き方なのだ。そこにこそ安心は生まれる。この仏教徒の残した巨大な遺跡群が、決して自らの文化の披瀝ではなく、また権力や財力の誇示でもなく、仏道を生きることによって得た「安心」のたまものである。ということ強く感じた。岩とは地球そのものである。あるいはこの安心感は、大地自然に近づいてその中で生きることの安心感かも知れない。自然の中で、我々人間の行いは本来自然に導かれて、無理のない自然に即した生き方となる。まさしくそれが仏教徒の生き方なのだ。

(冒頭の写真は2016年10月カンヘリー石窟にて)

【南天会会費・支援金】

2023 年 8 月 1 日～2023 年 12 月 25 日

624,250 円

※上記期間中に年会費以外で支援金をいただいた方のお名前です。

伊神玉蓮 池田裕司 伊藤友人 井上善雄 浦山慈水 大岡千尋 大橋裕
岡本洋幸 荻須眞教 甲斐千津子 甲斐三晴 香川弘昭 笠間研成
小西涼瑜 中村之恵 米沢直宏 蓮 坂田龍晴 桜たまき 佐藤茉莉奈
島本久嗣 菅原伸夫 田中雅幸 谷口雅志 手塚龍月 手塚龍女
中川豊俊 中西功 中村寛 西田光子 平原美智子 富士玄峰 藤森信行
別府良孝 本田照代 前川桂恵三 松田龍児 渡辺典子

(五十音順 敬称略)

その他、世話人・賛同人各会員の皆様から様々なご支援をいただいております。

【ビッグブッダ・プロジェクト寄付金】

2023 年 11 月 22 日～12 月 25 日

560,000 円

※寄付者ご芳名

飯田寿一 伊神玉蓮 伊藤直之 枝澤正仁 甲斐三晴 岸信一郎
小池誠 河野太通 坂田龍晴 佐々井淑江 穴戸末美 島本久嗣
菅原伸夫 武田英敬 武山博子 多田真祥 野田豊 廣瀬隆
福瀬くに子 別府良孝 宮崎智和 渡辺典子

(五十音順 敬称略)

ビッグブッダ・プロジェクト寄付金は、Arya Nagarjuna Education Society 事務局に寄託し、同 NPO からの事業報告を龍族にて皆様にお知らせします。尚、領収証等必要な方は、南天会発行の寄付金領収証をお送りいたします。南天会事務局にお問い合わせください。

※南天会支援金は、佐々井上人の要請に従い順次インドへ送金しております。

※10 月 24 日の改宗記念式典には、南天会ツアー参加者の方々が支援金、日本食その他佐々井上人にお持ちになりました。

※個別にナグプール訪問を計画される方は、南天会事務局にお知らせいただければ現地に連絡いたします。

※龍族バックナンバー、関係書籍・DVD頒布いたします。事務局までお問い合わせください。

あたたかいご支援ありがとうございます

◆南天会現況（令和6年1月1日現在）

正式会員数 266名

龍族発送者 533名

※贈呈者、大菩提寺裁判費用支援者、交流会等参加者を含みます。

◆賛同人（50音順）

漆間宣隆（浄土宗浄土院住職・前岡山県佛教会会長）

奥平心月（釣月庵庵主）

織田隆深（高野山真言宗真成院住職・密門会会長）

小野重徳（仏国土の会会長）

黒澤雄太（剣士・日本武徳院師範）

小池一郎（株式会社マクシスエンジニアリング常務執行役員）

高山龍智（佐々井上人お弟子）

土屋信裕（顕本法華宗弘通所法華行者の会主宰）

富士玄峰（臨済宗・元ナグプール同友会世話人）

宮淵泰存（日蓮宗妙光寺住職）

宮本光研（真言宗御室派元執行）

宮本龍勝（佐々井上人お弟子）

山本宗補（フォトジャーナリスト）

※賛同人について

当会の主旨を理解し、協力、推薦する人を賛同人とし、会の運営に助言提案等をいただいております。

※世話人について

南天会諸業務をお手伝いいただける方は皆世話人とし、特に任命等はいりませんので、どなたでも気軽に参加ください。

南天会会費・支援金はこちらまで

【金融機関】 ゆうちょ銀行

【加入者名】 南天会

【口座番号】 01380-0-90164

「龍族」同封の振替用紙、もしくは郵便局備え付けの振替用紙をご利用ください。

※他金融機関からの振込用口座番号

店名（イチサンキュー）一三九店（139）

当座 0090164

会員種類と年会費

支援会員 10,000円（会費＋支援金）／年

一般会員 5,000円／年

学生会員 2,000円／年（※大学生まで）

※会費納入済み年は、龍族送付用封筒の宛名ラベル右下に記載しています。

一般会員令和5年入金済→ 一般 R5

Syncable（シンカブル）

からも寄付ができます

オンラインで会費や支援金の決済ができる寄付プラットフォーム Syncable に団体登録しました。インターネットで Syncable を検索していただき、「団体を探す」→「南天会」で寄付ページを開けます。各キャンペーンも行っておりますので、ご参照ご紹介ください。

Syncable（シンカブル）QRコード



南天会事務局

〒179-0075

東京都練馬区高松 4-16-3-102

小林三旅 (090-4538-2677)

佐伯隆快 (090-5304-8955)

メール nantenkai@gmail.com

南天会フェイスブック・ツイッターご利用ください



【龍尾言】

新しい年を迎えると、そろそろ毎年6月の佐々井上人来日を考え始める時期がやってきます。今年もお元気なお姿でお迎えできるように、しっかりと準備を進めたいと思います。南天会は設立して10周年となる記念の年、そして辰年、龍の年です。10周年に相応しい企画も考えたいですね。皆様、ご協力よろしく願いいたします！（小林）